

復興とは何か：
日本災害復興学会「復興とは何かを考える委員会(2009-2011)」の経緯と成果
What is Fukko?

The history and outcome of the Fukko committee (2009-2010) at JSDRR.

○永松伸吾*1,*2
Shingo Nagamatsu*1,*2

本稿は、2009年から2011年にかけて日本災害復興学会に設置された「復興とは何かを考える委員会」の活動を記録し、その議論を整理しつつ、今後の復興に関する議論に貢献することを目的としている。この委員会の議論の結果、復興とは何かという問いに対しては、1) 理念的アプローチとして「どのような社会を目指すか」2)メカニズム的アプローチとして、「復興を成し遂げるにはどのような要素が必要か」3)ガバナンス的アプローチとして「復興をどのように決定し進めていくか」そして4)能力的アプローチとして「復興するための力や技術は何か」の4つに分類できることがわかった。さらに今後の復興を巡る課題として、復興と土地の関係について、マクロ的な制約について、そして「復興」という言葉の持つ政治性についての論点を指摘した。

キーワード: 理念、ガバナンス、メカニズム、レジリエンス

Keywords: philosophy, governance, mechanism, resilience

1. はじめに

本稿は、2009年から2011年にかけて日本災害復興学会に設置された「復興とは何かを考える委員会」(以下単に「委員会」とする)の活動を記録し、その議論を整理しつつ、今後の復興に関する議論に貢献することを目的としている。

本来もっと早期にこれらの成果を取りまとめるべきであったが、2011年3月の東日本大震災の発生を受けて、委員会の活動は事実上停止せざるを得なかった。それによって最終的なとりまとめも先送りとなっていた。

この震災から9年以上が経過し、東日本大震災の被災地でもこれまでの被災地と同じように、「復興とは何か」という根本的な問いを発しはじめている。日本災害復興学会としても、この時期に改めて復興を学問的に捉えなおす必要があると思われ、本稿はその一助となれば幸いである。

2. 委員会について

この委員会は、中林一樹(明治大学特任教授)を委員長、筆者(人と防災未来センター副研究主幹・当時)を幹事として、2009年5月から2011年1月まで14回の研究会と2度の公開討論会を行った(表

1)。委員会と銘打ってはいるものの、特に固定された委員がいたわけではなく、学会員すべてに公開で行っていたため、実質的には研究会以上のものではなかった。当時の議論のほとんどは学会ホームページにて公開されている。本稿の議論は主にそれらの記録に依拠している。なお、これと並行して、7度のワーキンググループ(永松伸吾、宮本匠、石川永子、近藤民代、魚住由紀)を開催し、阪神・淡路大震災や新潟県中越地震に関する先行研究288本で語られる復興のレビューを行った。

ところで、委員会設立にあたっては、復興の定義を固定化することへの懸念が多く学会理事から提起された。そこで、委員会の目的はあくまで、学会が扱う復興という概念の広がり把握するといったところに置き、委員会としての最終的な見解を提起するという点については必ずしも目的としなかった。このため、本稿での内容は、あくまで幹事として委員会に関わった筆者個人の責に帰するものである。

3. 復興とは何か

3.1 復興の定義

復興の定義について室崎は「破壊や疲弊からの出

*1 関西大学社会安全学部・大学院社会安全研究科 教授 博士(国際公共政策)
Professor, Faculty of Societal Safety Sciences, Kansai University, Ph.D.

*2 国立研究開発法人防災科学技術研究所 災害過程研究部門 部門長
Manager, Disaster Resilience Research Division, NIED.

表 1 委員会の活動

2009(平成 21)年	
第 1 回	5 月 30 日 (土) 14:00~17:00 (東京) 中林一樹 「復興とは」委員長 (首都大学東京) 木村拓郎 企画委員長 (社会安全研究所) ・復興理念、事前復興論、被災者生活再建
第 2 回	6 月 13 日 (土) 13:00~16:00 (大阪) 室崎益輝 会長 (関西学院大学教授) 村井雅清 副会長 (被災地 NGO 協働センター) ・復興理念、阪神大震災、被災者支援
第 3 回	7 月 11 日 (土) 14:00~17:00 (東京) 稲垣文彦 (中越防災安全推進機構) 田中 淳 (東京大学) ・中越地震、集落復興、復興支援、高齢者
第 4 回	8 月 8 日 (土) 14:00~17:00 (大阪) 矢守克也 (京都大学) ・四川大震災、圧縮される復興、語る
第 5 回	9 月 12 日 (土) 14:00~17:00 (東京) 渥美公秀 (復興デザイン研・大阪大学) 宮原浩二郎 (関西学院大学) ・復興理念、中越地震、復興研究
第 6 回	10 月 10 日 (土) 14:00~17:00 (大阪) 塩崎賢明 (神戸大学工学部) 上村靖司 (長岡技術科学大学) ・住宅再建、中越地震、復興支援
第 7 回	11 月 14 日 (土) 14:00~17:00 (大阪) 津久井進・山崎栄一 (復興法制度研：弁護士・大分大学) 山中茂樹 (関西学院大学) ・復興基本法、憲法、人間復興、復興の立脚点
第 8 回	12 月 12 日 (土) 14:00~17:00 (東京) 越山健治 (人と防災未来センター) 大矢根淳 (専修大学) ・復興感、復興曲線、復旧曲線、復興研究
2010(平成 22)年	
公開研究会 1 月 11 日 (月) 11:30~16:00 (関西学院大学上ヶ原キャンパス)	
①復興とは何かを考える・中間報告 (永松伸吾)	
②公開ワークショップ 「災害復興とは何か」	
コーディネーター 中林一樹 (首都大学東京)	
発言者 加藤孝明 (東京大学) 矢守克也 (京都大学) 稲垣文彦 (中越防災安全推進機構) 魚住由紀 (フリーアナウンサー)	
コメンテーター 室崎益輝 (関西学院大学)	
第 9 回	2 月 13 日 (土) 14:00~17:00 (東京) 加藤孝明(東京大学) 饗庭伸(首都大学東京) ・復興まちづくり・復興ガバナンス +君嶋福芳(災害ボランティアオールとちぎ)
第 10 回	5 月 15 日 (土) 14:00~17:00 (東京) 浦野正樹(早稲田大学)、吉川仁(首都大学東京) ・レジリエンシー、関東大震災
第 11 回	6 月 12 日 (土) 14:00~17:00 (大阪) 小林郁雄(神戸山手大学)、野崎隆一(神戸まちづくり研究所) ・阪神・淡路大震災、復興支援会議、市民活動、マンション再建
第 12 回	7 月 10 日 (土) 14:00~17:00 (東京) 澤田雅浩(長岡造形大学)、木村玲欧(富士常葉大学) ・中越地震からの復興、復興カレンダー
第 13 回	8 月 28 日 (土) 14:00~17:00 (大阪) 林春男 (京都大学)、広原盛明 (龍谷大学) ・生活復興モデル、開発と復興
第 14 回	9 月 18 日 (土) 14:00~17:00 (大阪) 黒田裕子 (阪神高齢者・障害者支援ネットワーク)、永松伸吾 (関西大学)
2011 (平成 23) 年	
公開研究会 1 月 (関西学院大学上ヶ原キャンパス)	
ワーキンググループ・2009(平成 21)年	
6 月 15 日	第 1 回 WG (関西学院大学)
7 月 1 日	第 2 回 WG (関西学院大学)
7 月 15 日	第 3 回 WG (関西学院大学)
収集した文献を分担して、論点整理作業に取り組んでいる。	
11 月 12 日	第 4 回 WG (人と防災未来センター)
12 月 8 日	第 5 回 WG (人と防災未来センター)
2010(平成 22)年	
5 月 6 日	第 6 回 WG (関西大学)
5 月 25 日	第 7 回 WG (関西大学) 注) 肩書は当時

発」¹⁾と幅広い定義を提起した。但しこの委員会での議論は自然災害からの復興に限定されているため、大規模事故、戦争などからの復興との共通性は必ずしも担保されない。

3.2 復興を問うことの意味

そもそも、復興を問うこと、すなわち復興を学問対象とすることの意味は何か。加藤は、未経験、未知の復興に対応するための知見と蓄積をしていくこと、またそれを通じて平時の社会のあり方に対する問題提起をしていくことの必要性を指摘している²⁾。また、筆者は研究会の中で、社会の複雑化とともに災害リスクの多様化と不確実性が增大していること、それに伴い防災から減災へのパラダイムシフトが発生したことで事後的な復興の重要性を増していることを指摘している³⁾。

3.3 「復興とは」に対する 4 つのアプローチ

委員会での議論や先行研究のサーベイによって、「復興とは」という問いに対する回答のアプローチは、図 1 のように 4 つに分類して整理できることがわかった。ここで、縦軸は、現場・実践指向か、あるいは科学・理論指向かを示している。能力的アプローチは実践指向であり、他方でメカニズム・アプローチは復興の理論化を指向するものと整理されている。また、それぞれのアプローチは相互に作用している。例えば、復興の理念が変われば、それを実現する能力は異なる事は容易に想像される。そのような相互依存関係についても図 1 は示している。以下、それぞれのアプローチについて順を追って説明する。

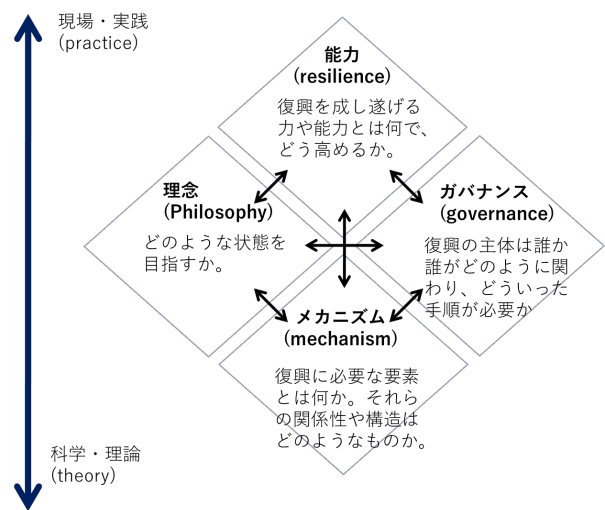


図 1 復興を問う 4 つのアプローチ

(1) 理念(philosophy)的アプローチ

このアプローチは、復興の目標やあるべき社会像を提示することで、復興とはという問いに答えようとするものである。こうした問いかけの中で生まれたいくつかの概念について紹介する。

一つは「人間復興」である。この概念は関東大震災の復興過程で福田徳三が初めて提起したもののだが、都市基盤の復興を、人間の生活の復興のための手段と捉え、人間の生活の回復をより上位に置く考え方を指している⁴⁾。それは、福田⁴⁾の以下の文章に端的に示されている「人間の復興とは、大災によって破壊せられた生存の機舎の復興を意味する。…通路や建物は、この節目の機舎を維持し擁護する道具立てに過ぎない。それらを復興しても、本體たり實質たる榮生の機會が復興せられなければ何にもならないのである。(p.133)」。

塩崎⁶⁾は、災害復興はそこで生きてきた人たちの生活や商売などの回復を成し遂げなければならず、都市機能の回復はその折り合いをつけながら必要最小限で行ってもよいという考え方を示した。室崎⁹⁾は「復興は都市が復興するのではなく、都市のなかに人間がいる。人間が復興するのが大切なのだ。」と述べ、村井⁹⁾は「くらし」があって「住まい」がある、「住まい」があって「くらし」があるのではない。」と述べるなど、阪神・淡路大震災でもその考え方の重要性が指摘された。

もう一つは、「最後の一人まで」という理念である。社会的弱者生活再建は遅れがちであるし、苦勞を伴う。こうした弱者の生命を同じように尊重し、支えていくという考え方は、特に阪神・淡路大震災の復興ボランティアや市民活動の中で共有され、理念化された⁷⁾。また、渥美⁸⁾では「あるべき復興とは、一人一人のかけがえのない生に思いを馳せ、希望をもって生きていく現実と一緒に構成していくこと」と、その理念を災害復興の具体的な目標に設定している。

次に山中が強調したのは「被災地の自決権」である⁵⁾。山崎によれば復興とは被災地外部から押し付けられたり強要されたりするものではなく、「被災地の自治を基調にしなが、被災者個人の自律を回復することである」⁵⁾。

室崎⁹⁾は復興の3条件を提示している。第一に被災者の自立を尊重することを掲げ、これはこれまで紹介した人間中心の考え方に沿っている。だが室崎はそれに加え、②地域社会の持続に心がけること、③歴史文化の継承に努めることを提示している点は先駆的であるといえよう。

これらの理念について異論が提起されることはなかったものの、林や広原が主張した「より災害に強い社会を作る」という理念¹⁰⁾については大きな論点となった。すなわち、塩崎は、阪神・淡路大震災の復興過程で、防災性能を高めるという目的のもと、大規模な開発事業が繰り返されたという認識を示し、まずは被災者の生活の再建を先にすべきであり、一足飛びに将来の災害の備えまで復興の中でやろうとする考え方について異議を唱えたのである⁶⁾。

一般的に、復興を防災サイクル(対応、復興、被害軽減、予防)の一部として捉える立場は、より災害に強い社会にすることは復興の大前提として捉える。林は、そのエビデンスとして、阪神・淡路大震災で被災した神戸市民を対象としたワークショップから、生活再建の7要素の中の一つに「そなえ」があることを指摘する。他方で、塩崎が指摘したのは、次なる災害への備えを口実として、ハードに巨額の投資を行う復興への厳しい批判であり、この点については研究会でも多くの理解を集めたように思われる。

なお、こうした復興の理念が語られる背景には、現状の社会問題を復興過程で解決しようとする働きがある。矢守¹¹⁾はこの点について『世直し』-『立て直し』論として理論的にまとめている。復興を過去から現在へと至るスムーズな社会の移行を断絶させたものととらえ、抜本的な「新規まちづくり」へと邁進するという反応を『世直し』と呼び、他方で未来を真性の未知としてではなく予定済の将来という形で確保しようとする働きを『立て直し』と捉え、復興過程において両者がせめぎあうことを示している¹²⁾。

稲垣¹³⁾は「システムの外部依存による不安感やあきらめ感の増大が回復力を阻害している。もう一度内部化する、自分たちで何か考えてやっていくんだということが復興まちづくりに必要」と、復興における自律性や自己コントロール感の必要性を指摘した。上村¹⁴⁾らは「環境の変化に迅速に適応できる創発適応力、回復できる力を獲得できていくのがいい復興である」を主張した。さらに中林は持続可能性の概念を導入し、「地域が自律的に発展していけることが『創造的』な復興である。」¹⁵⁾といった主張が行われたが、これらはいずれも後の「能力的アプローチ」につながってくる主張である。

(2) メカニズム(mechanism)的アプローチ

このアプローチは、復興に必要な要素やそれらの関係性を明らかにしようとするものである。復興の

メカニズムがわかれば、復興を促進するための政策を検討することはより容易になるうえに、復興の程度や質を客観的に評価することも可能になる。

このアプローチの代表的なものは、生活再建7要素モデル¹⁵⁾である。林は生活再建に必要な要素として、神戸市の被災者によるワークショップから、①すまい②つながり③まち④そなえ⑤こころとからだ⑥くらしむき⑦行政とのかかわり、という7つの要素を抽出した。同様に木村も、個人の生活再建に必要な要素として、①住宅②集落③いきがい④仕事・収入⑤再建資金⑥文化を提示している¹⁶⁾。

これまでに多くの研究が、復興を客観的な指標で評価しようとしてきた。そのパイオニア的な研究は、中林が酒田大火の被災地で行った復興曲線の研究である¹⁷⁾。中林は地域の復興の指標を、例えば再建された住宅の量など、客観的な指標を用いて、集合的な指標として捉えようとした。

他方で、木村¹⁸⁾による生活再建カレンダー調査は、個々の被災者アンケートによって主観的な復興度を導き出し、それらを集計することによって地域の復興程度を把握しようとしている¹⁹⁾。このアプローチは、個人の復興感をベースとしている点において、人間主体の復興の評価としては優れているものの、集合的な評価であることについては注意すべき点もある。例えば7割の復興という意味は復興したと考える被災者が7割いるという意味であり、個々の被災者が7割程度復興しているわけではなく、一人ひとりを見れば全く復興していない人もいる可能性に留意しなければならないと矢守¹¹⁾は指摘した。そこで、中越地震の被災地における「復興プロセス研究会」では、宮本らによって「復興感曲線」の開発が行われた²⁰⁾。これは、被災者の個別的心理状態を訪ね、被災者の調査者が対話をしながら、個別に復興プロセスを評価していくものである。これは非常に主観的な評価であり、そのゆえに必ずしも不可逆的ではない。言い換えれば、右肩上がりの曲線であるとは限らないのである。これに関して、復興における時間の在り方については、矢守が重要な問題提起を行っている。我々は、暗黙のうちに復興の時間はすべての人に共通のものであることを前提としている。しかし、「本当に同じ時間がみんなに流れているのか」として、人によっては時間が逆戻りしたような境遇に置かれる可能性についても指摘している¹¹⁾。このことは、我々が復興は時間とともに達成されるという、復興の不可逆性ともいべき暗黙の前提に疑問を提起するものとして興味深い。

さらに上村²¹⁾は「復興熟度評価」として、コミュニティにおける人々の関わり方などを中心とした評価指標を提案している。具体的には、①「こうなりたい」の共有、②「やれる！」と言う自信、③友好的な外部者の存在、④「こうありたい」の共有、⑤主体性、自立心、⑥自由で活発な発想・議論の雰囲気、である。これまで紹介した復興指標がアウトカムの評価であったのに対して、復興熟度評価はそれ自体がアウトカムというよりも、むしろ復興の議論を進めていくプロセスや心構えに焦点を当てているという点で他の指標と一線を画している。

また、中越地域の復興の中間支援組織として活動した稲垣²²⁾は、右肩上がりの成長を前提とした復興の考え方では、中越はいつまで経っても復興できないため、評価の軸を「ずらす」必要性に気がついたという。むしろ、その評価の軸を探ること、言い換えれば新たな豊かさを探ることこそが復興ではないかと提起している。

このように、一言で復興の評価といえども、復興のメカニズムをどのように捉えるかによって、その評価の方法は異なる。とりわけ、復興をコミュニティや社会の集合的な概念と捉えるのか、あるいは個人の問題と捉えるのかは、復興指標の在り方の議論を越えて、復興をめぐる議論の大きな論点となっている。

例えば加藤²³⁾は、よい復興にはバランスが必要として、次の四つの対立軸を示している。①急ぐ生活再建と時間のかかるまちづくり②個人の最適化とまちの最適化③まちの最適化と都市・地域の最適化④今の市民×未来の市民。この認識は、個人の復興とコミュニティの生活再建とは一定の代替関係があることを示唆している。

他方で、田中²³⁾はコミュニティと個人の復興は相互依存関係にあるとし、それ故に補完的な関係にあるという見方を示した。この観点は特に中越地震の復興過程において強調されている。例えば、上村は「復興とは人間で、複数の人々が同じ目的で何かを一緒にやっているイメージ」⁶⁾、稲垣は「復興の「人」というよりは「人々」という感覚で捉えている」¹³⁾という言葉によって、コミュニティと個人の不可分性を主張している。

このような立場に立つと、コミュニティは個人の復興感を規定する重要な役割を担うことになる。例えば、コミュニティにおける被災者の立ち位置が、支援される側から支援する側に変化することで、被災者の復興感が高まることは矢守¹¹⁾、稲垣¹³⁾、村井

¹⁾ など多くの論者が指摘するところであった。

(3) ガバナンス(governance)的アプローチ

このアプローチは、復興の主体、プロセス、手続の在り方から復興とは何かという問いに答えようとするものである。例えば饗庭²⁾は、よい復興に関する三つの「正義」として、①科学的な正しさ②主体の合理性③決め方の合理性、を挙げている。また、室崎¹⁾は復興プロセスに必要な要素として、①連続性②戦略性③補完性④共創性⑤変革性⑥包括性を掲げている。中林¹⁶⁾は、被災者にとって、次世代にとっての復興になるための7つのPとして、①方針②計画③被災者④過程⑤参加⑥政策⑦シンボル、を掲げている。

ここにおいて論点の一つは、復興のプロセスにおいて専門家の役割はどのようなものかというものである。小林²⁴⁾は復興まちづくりにおける専門家の重要性を指摘しているが、渥美⁸⁾は「専門家そのものための活動が目的となってしまう、本当に被災者のためになっているのか、誰の為の活動かを忘れさせてしまう。」として復興過程における専門家の活動に対して警鐘を鳴らしている。

復興の主体はだれかという問いも、ガバナンス的アプローチにおいては重要な論点である。少なくとも、行政ではないことについてはほぼすべての論者が認めるところであるが、「被災者」が主体という点についても論点が多数存在する。そもそも「被災者」の定義が明確ではなく、村井は「復興のプロセスの中で、復興の主語は人間のためと思う。「被災者」だと被災者にはいろんな人がいるので100%にならない。結局は人間の社会にとってということが大切。」¹⁾と指摘している。永松³⁾は「日本にとっての復興、中越地域にとっての復興、集落にとっての復興、個人にとっての復興は必ずしもイコールではない。どれを採用するかは問題」と、復興の主体をどのレベルに求めるかの問題を提起している。さらに上村¹⁴⁾は、次の世代を復興主体に含めることを含意しつつ「今の被災者にあんたたちどうしたいのということを問うことが必ずしも適切ではないのでは。中越は次世代がいるかいないかが問題。」と指摘している。

合意形成のありかたももう一つ重要な論点である。すでにみたように、個々人の被災者の復興と被災地の復興とは必ずしも一致しない。そこで「被災者一人ひとりの『多義的復興』と、被災地・社会の『一義的復興』はどのように調和できるか。」こそが合意形成の課題であると中林¹⁶⁾は指摘している。そして、

その合意形成の在り方について、稲垣は中越地震の経験から「計画型・課題解決型・直線型に対して、創発型・プロセス重視型・非線形型」²³⁾上村は「合意形成→アクション→議論→問題設定→合意形成→アクションという循環型。決めたからそれで永遠に続けるというわけではない」⁶⁾といった意見が出された。

しかしながら、復興のプロセスに無限の時間を投じることができるわけではない。復興は一定の時間的制約のもとで行われなければならない、とりわけ、中林が指摘するように、事業者らにとっては復興の時間は死活問題となる¹⁶⁾。そこで、室崎は「総論と各論の問題がある。総論は早く決める、各論はゆっくり決める。」¹⁾といった主張がある一方で、渥美⁸⁾はあえて急がずに被災者自らが納得のいく意思決定ができるために「待つ」ことの重要性を指摘している。

(4) 能力(resilience)的アプローチ

最後は、能力的アプローチである。浦野²⁵⁾は米国の研究におけるレジリエンス(resilience)という概念を紹介し「地域や集団の内部に蓄積された結束力やコミュニケーション能力、問題解決能力に目を向けていくための概念装置」とした。端的に言えば「復興する力」である。これは室崎⁹⁾が提示した「復興バネ(気概のバネ・反省のバネ・制度のバネ)」、中林¹⁶⁾が提示した「地域復興力(3Qと7P)」に通じる考えである。また、中林¹⁶⁾や加藤²⁾らが示した「事前復興」とはまさしく、こうした復興する力を地域に蓄積するための取り組みであると言えよう。

また復興過程において、地域の復興を促進するための社会技術もいくつか提示されている。例えば宮本・渥美²⁶⁾が提示した「物語復興」も、地域が将来の復興のビジョンを共有するための手法として提示された。永松が中越地震・中越沖地震で観察した「弁当プロジェクト」²⁷⁾は、災害対応の業務を地元被災業者の仕事として位置づけ、地域の経済復興を促進するための手法である。こうした被災地のエンパワーメントとそれを支える支援や仕組みの在り方に関する実践的な提案は、日本災害復興学会がこれから担うべき重要な役割かもしれない。

この議論が行われた頃は、まだ日本にはレジリエンスという概念は本稿執筆時に比べて普及していなかった。しかしながら、東日本大震災のような巨大災害を経験した我々にとって、レジリエンスは極めて魅力的な概念装置である。なぜならば、巨大な災害を前もって予測し、それに備えることには限界が

あり、ある程度状況に応じて柔軟に社会の活動を回復させていく必要があるからである。

しかしながら、レジリエンスという概念には一般的には復興だけではなく、被害を一定程度食い止め社会の機能を止めないようにするという考え方も含まれており、我が国における災害復興概念とは必ずしも一致していない。そうだとすると、世界で流行するレジリエンス概念とは別に、災害復興という概念を打ち立てることにどのようなメリットがあるのか、こうしたことも今後の災害復興を巡る大きな論点の一つになり得るだろう。

4. 展望

この委員会の議論から10年が経過した。紹介した論点の多くは現在においても有効なものだと思われるが、東日本大震災以降にもたらされた新たな復興の論点についても提起しておきたい。

一つは、復興と土地の問題である。福島第一原発事故は長期に渡って人々がその土地から離れざるを得ない状況を生み出した。これまでの復興の議論は、被災者と被災地が一体不可分であることを暗黙に前提としていたが、元の被災地から遠く離れたところでコミュニティや生活を再建するということの是非やその可能性についてももっと議論が深められるべきであろう。

第二に、マクロ的な議論である。東日本大震災の被災地の規模の大きさは、個々の地域や集落レベルの復興において、人材の不足、知識の不足、事業を担う事業者の不足、被災地全体の先行きの不透明さという不確実性などに向き合わざるを得なかった。首都直下地震や南海トラフ地震になると、日本の中枢あるいは主要地域の多くが被災する事態となり、上記の制約はさらに高まる一方で、地域の復興と国家の復興の間に緊張関係が生じる可能性も否定できない。そうしたメタな議論が求められる。

最後に、復興という言葉の持つ政治性である。広原²⁸⁾は「地震は自然現象」、「震災は社会現象」、「復興は政治現象」と述べたが、復興過程の政治性ではなく、復興という言葉そのものが政治的に用いられるということである。

日本災害復興学会の議論の大前提は、少なくともこの委員会においては、復興とは被災後の社会が目指すべき絶対善であるという前提があった。復興という言葉の元に、被災者も行政もボランティアも一体となることができた阪神・淡路大震災や中越地震では、この前提は疑われることはなく、だからこそ

「復興」が何かを問う必要が生じたのである。

しかしながら、東日本大震災からの復興過程では、元の土地に戻って暮らすという、従来の復興のやり方が必ずしも適当でない場面が目立った。あまりに被害が激甚であったため、元の土地で暮らすことが不可能なケースも続出した。それが可能な場合であっても、防潮堤の建設など景観そのものを変えてしまうほどの大規模な公共事業を伴い、4兆円を超える費用をかけて放射性物質の除染を行う必要があった。しかしながら、そうした努力にも関わらず必ずしも被災地の人口は元には戻らず、むしろ大規模な面的整備事業を行った地域ほど人口減少は加速した²⁹⁾。冷静に考えれば、多くの人々がその意義を疑いかねないこうした財政支出が当然のように行われているのは、それが「復興」を目的として行われているからである。「復興」は被災地における絶対的正義であるから、いかに眼下の復興事業に不満があっても、それに反対することはほとんどの人々にとって勇気のいることである。このような「復興」という言葉の持つ政治性を考慮すれば、新たな復興のあり方を提起するにはむしろ「復興」という言葉をあえて否定するようなアプローチも必要なのかも知れない。

補記

本稿は、永松伸吾(2017)「復興とは何か：回答のための4つのアプローチ」日本災害復興学会神戸大会報告原稿を増補したものである。

参考文献

- 1) 日本災害復興学会(2009)復興とは何かを考える委員会議事録(要旨), 第2回. http://www.f-gakkai.net/uploads/fukkotowa/090613giji_youshi.pdf (2020-06-13)
- 2) 日本災害復興学会(2010)復興とは何かを考える委員会議事録(要旨), 第9回. http://www.f-gakkai.net/uploads/fukkotowa/100213giji_youshi.pdf (2020-06-13)
- 3) 日本災害復興学会(2010)復興とは何かを考える委員会・永松プレゼンテーション, 第14回. <http://www.f-gakkai.net/uploads/fukkotowa/100918nagamatsu.pdf> (2020-06-13)
- 4) 福田徳三(2012)復興経済の原理及び若干問題(復刻版), 関西学院大学復興制度研究所.
- 5) 日本災害復興学会(2009)復興とは何かを考える委員会議事録(要旨), 第7回.

- http://www.f-gakkai.net/uploads/fukkotowa/091114giji_youshi.pdf (2020-06-13)
- 6) 日本災害復興学会(2009)復興とは何かを考える委員会議事録(要旨), 第6回.
http://www.f-gakkai.net/uploads/fukkotowa/091010giji_youshi.pdf (2020-06-13)
- 7) 市民とNGOの「国際」防災フォーラム実行委員会(1998)阪神大震災・市民が作る復興計画, 神戸新聞総合出版センター.
- 8) 日本災害復興学会(2009)復興とは何かを考える委員会議事録(要旨), 第5回.
http://www.f-gakkai.net/uploads/fukkotowa/090912giji_youshi.pdf (2020-06-13)
- 9) 室崎益輝(2009)災害からの復興のあり方について, 災害復興研究(1), 1-7.
- 10) 日本災害復興学会(2010), 復興とは何かを考える委員会議事録(要旨), 第13回.
http://www.f-gakkai.net/uploads/fukkotowa/100828giji_youshi.pdf (2020-06-13)
- 11) 日本災害復興学会(2009)復興とは何かを考える委員会議事録(要旨), 第4回.
http://www.f-gakkai.net/uploads/fukkotowa/090808giji_youshi.pdf (2020-06-13)
- 12) 矢守克也(2008)「災害復興における『立て直し』志向と『世直し』志向」日本災害復興学会2008年度学会大会予稿集, 47-52.
- 13) 日本災害復興学会(2009)復興とは何かを考える委員会議事録(要旨), 第3回.
http://www.f-gakkai.net/uploads/fukkotowa/090711giji_youshi.pdf (2020-06-13)
- 14) 日本災害復興学会(2009)復興とは何かを考える委員会議事録(要旨), 第6回.
http://www.f-gakkai.net/uploads/fukkotowa/091010giji_youshi.pdf (2020-06-13)
- 15) 林春男編(2000)神戸市震災復興総括・検証生活再建分野報告書, 京都大学防災研究所巨大災害研究センター・テクニカルレポート.
- 16) 日本災害復興学会(2009)復興とは何かを考える委員会議事録(要旨), 第1回.
http://www.f-gakkai.net/uploads/fukkotowa/090530giji_youshi_1.pdf (2020-06-13)
- 17) 中林一樹(1988)酒田大火における被災者の生活復旧過程に関する研究, 日本都市計画学会学術研究論文集(23), 481-486.
- 18) 日本災害復興学会(2010)復興とは何かを考える委員会議事録(要旨), 第12回.
http://www.f-gakkai.net/uploads/fukkotowa/090530giji_youshi_1.pdf (2020-06-13)
- 19) 木村玲欧ほか(2004)被災者の主観的時間評価からみた生活再建過程:復興カレンダーの構築, 地域安全学会論文集, 6, 241-250.
- 20) 宮本匠・渥美公秀(2008)被災地住民にとっての復興過程の意味づけについての研究:~中越地震3年の時点におけるインタビュー調査から~, 日本心理学会大会発表論文集72(0), 1AM145-1AM145.
- 21) 上村靖司(2009)地域復興における熟度評価の試み. 長岡大会日本災害復興学会講演論文集, 21-24.
- 22) 稲垣文彦(2013)中越地震における地域復興支援員に学ぶ, 農村計画学会, 32(3), 354-357.
- 23) 日本災害復興学会(2009)復興とは何かを考える委員会議事録(要旨), 第3回.
http://www.f-gakkai.net/uploads/fukkotowa/090711giji_youshi.pdf (2020-06-13)
- 24) 日本災害復興学会(2010)復興とは何かを考える委員会議事録(要旨), 第11回.
http://www.f-gakkai.net/uploads/fukkotowa/100612giji_youshi.pdf (2020-06-13)
- 25) 浦野正樹(2010)災害研究のアクチュアリティ——災害の脆弱性/復元=回復力パラダイムを軸として——, 環境社会学研究, 16, 6-18.
- 26) 宮本匠・渥美公秀(2009)災害復興における物語と外部支援者の役割について~新潟県中越地震の事例から~, 実験社会心理学研究, 49(1), 17-31.
- 27) 永松伸吾(2007)「地震に負けるな地域経済:小千谷・柏崎発「弁当プロジェクト」のススメ」防災科学技術研究所.
https://dil-opac.bosai.go.jp/publication/pdf/bento_pj.pdf (2020-06-13)
- 28) 日本災害復興学会(2010)復興とは何かを考える委員会議事録(広原ペーパー), 第13回.
<http://www.f-gakkai.net/uploads/fukkotowa/100828hirohara.pdf> (2020-06-13)
- 29) Nagamatsu, S. (2018) Building back a better Tohoku after the March 2011 tsunami: Contradicting evidence. *The 2011 Japan Earthquake and Tsunami: Reconstruction and Restoration*, Springer: 37-54.